

## 幕末・維新期の文法研究

著者	中山 緑朗
雑誌名	白山国文
号	2
ページ	37-48
発行年	1998
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006355/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006355/</a>



# 幕末・維新期の文法研究

——「下一段活用」をめぐる——

中山 緑 朗

一

日本語文法研究の歴史を振り返って見たとき、江戸時代においては、国学者による動詞の活用研究は伝統的なヘテニヲハ研究とともに、文法研究の中心的な役割を担っていたと見ることができよう。なかでも江戸時代中期以降に隆盛の時期を迎えた動詞の活用研究は、今日の文法研究の水準から見てもきわめて高度な成果をもたらした。国学者による研究は、現在の私たちが学校で文法を習ったり、現行の国語辞書の動詞語彙に関する記述の始めや、国語辞書の付録の文法学説などの項で目にしたりする「五段活用」などの動詞の活用の整理分類の方法として進展し、幕末にはほぼ完成の域に近づいていた。<sup>(注1)</sup>

幕末から明治時代には動詞の活用研究は文法学説の一部に位置付けられ、活用表として整然と配列されていくことになる。このような明治時代以降の学説の展開については、文法

研究史や国語学史の記述のうちに含まれる形で多くの先学によつて解説されてきた。<sup>(注2)</sup>

筆者もかつて先学の教えに導かれながら、古代から江戸時代までの動詞の活用に関する認識の進展を辿ったことがある。その際、動詞の活用表が整えられていく過程で、国学者たちは活用を理解していくとき五十音図を根拠とし、動詞認識の基本的な手掛りとしていくことを教えられた。さらにはこのことにとどまらず、平安時代末期以来、現代に至るまで五十音図の存在が動詞に限らず日本人の言語認識に与えた影響力や拘束力がきわめて強いものであったことを知らされたのである。

例えば身近なところで例を挙げると、現行の日本語の古語に関する教科書や辞典類を見渡したとき、動詞の五段活用などの活用形式の種類や終止形などの活用形の名称については、ほぼ共通した認識の下にあると見ることができ。つまり江戸時代の本居春庭らが五十音図を規範にして動詞の活

用形式や活用形を分類し整理した方法である。

これらは動詞については、おおむね次のように分類する。

活用の種類	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	思ふ	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
上二段活用	見る	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ
下二段活用	蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
上二段活用	生く	生	き	き	くる	くる	くれ	きよ
下二段活用	出づ	出	で	で	づ	づる	づれ	でよ
ラ行変革活用	有り	有	ら	り	り	る	れ	れ
ナ行変革活用	死ぬ	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
サ行変革活用	為	(為)	せ	し	す	する	すれ	せよ
カ行変革活用	来	(来)	こ	き	く	くる	くれ	(こ)よ

(三省堂『明解国語Ⅱ』平成七年版)

但し、口語との関連性を重視して、上段に口語の活用表、下段に文語の活用表を対照させている場合は、

種類	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段	書く	か	か	き	く	く	け	け
ナ変	死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ変	有り	あ	ら	り	り	る	れ	れ
下二段	蹴る	○	け	け	ける	ける	けれ	けよ
上二段	着る	○	き	き	きる	きる	きれ	きよ
上段	起く	お	き	き	く	くる	くれ	きよ

下段	サ変	カ変
受く	す	来(く)
う	○	○
け	せ	こ
け	し	き
く	す	く
くる	する	くる
くれ	すれ	くれ
けよ	せよ	(こ)よ

(旺文社『古文』平成六年版)

のように分類する方法が一般的である。蛇足であるが、これはナ変・ラ変・下二段活用の「死ぬ・去ぬ」「有り」「蹴る」が、口語ではそれぞれ五段活用に遷り変わることが反映した整理である。また上・上二段活用はともに上二段になること、下二段活用は全体に下二段化することについては、動詞活用の全体的な単純化が反映していると思われるが、いずれにしても口語文法で変格活用はカ変とサ変の二つに絞られてきている。

## 二

ところで本稿は、古語における唯一の下二段活用の語である「蹴る」に焦点を絞りつつ「下二段活用」が文法研究史の上で成立した時期について検証を試みるものである。江戸時代後期に父である本居宣長の研究を継承しつつ、動詞の活用研究を大きく進展させた本居春庭が「四種の図」に含めていないにもかかわらず、前述したように現在の古典の教科書や古語辞典の類では唯一の下二段活用の例として「蹴る」が挙げられるようになった過程について、文法研究史という観点

から辿つてみようとするものである。

下一段活用について『<sup>注1</sup>日本文法大辞典』では次のように解説する（項目の執筆は山口明穂氏）。

古語では「蹴る」一語である。ただし、古語の「蹴る」については、下二段に活用したのではないかという説がある。古くは「蹴る」は、ワ行下二段活用の語ではなかったかということも考えられる。また、平安時代の和文の中に例が少なく、わずかに、『落窪物語』『栄花物語』の中に、未然形・連用形・終止形の例が見られるだけであり、これは、後世に書写される過程で生まれたという可能性もある。以上のような理由から、「蹴る」が下一段活用の語であつたと断定することは危険だという考え方も出て来るのである。しかし、現在の段階では少なくとも平安時代以降は、下一段活用であつたと、一般には考えられている。

また『研究史』として、本居宣長・鈴木朗・本居春庭らの「蹴る」に関する捉え方が紹介され、とくにその後、林國雄が『詞の緒環』において一段活用を「上・中・下」の三種に分類していることを取り上げている。「上」は現在の上一段活用にあたり、「中」は現在の下二段・カ変・サ変の各活用を分類し、「蹴る」などを下一段とする説である。今日の学説でいう「下一段」よりも広い概念であるが、

「蹴る」の活用を認識し、下一段という新しい名称を用いた功績は認められる。しかし、この下一段活用は、なかなかその後の学者に認められず、堀秀成などはこの國雄の説を知りつつも認めようとしない。そして権田直助になって、上下の一段を区別し、現在と同じとらえ方がされるようになったのである。

と解説している。この下一段活用「蹴る」の研究史上の解説について大筋では認められるものの、細かい点でいくつか見解の相違があるので、次に指摘したい。

### 三

本居宣長の『活用言の冊子』（『御国詞活用抄』『言語活用抄』の書名で一般に流布したもの）の原本）では、

第十五會 エ ウ ウル

○クウ 蹴

○スウ 會居

○ウ、 飢

○ウ、 植

第二十五會

○イ イル 鑄

○イ イル 射

○イ イル 沃

○キ キル 著 ○ニ ニル 似  
 ○ニ ニル 煮 ○ヒ ヒル 干  
 ○ヒ ヒル 簾 ○ミ ミル 見  
 ○キ キル 居 ○キ キル 率  
 ▲コ、ロミル ▲ヒキキル  
 ○ヘル 糸(他筆) 筆者不明の書き入れ  
 のようになってゐる。

ところが一般に流布した『御国詞活用抄』(明治十九年大阪で刊行)では次のようになってゐる。<sup>(注5)</sup>

第十五會 エ ウ ウル

クウ 蹴

スウ 會居

ウ、 飢

ウ、 植

第二十五會

イイル 鋤

イイル 射 ケ ケル 蹴

キキル 著 ヌ ヌル

ニニル 似

ニニル 煮

ヒヒル 干

ヒ ヒル 簾  
 ミ ミル 見  
 キ キル 居  
 キ キル 率  
 コ、ロミル  
 ヒキキル

(付箋)

考ニコ、ロミルハ誤ナルベシ、コ、ロミ コ、ロム  
 コ、ロムル トハタラクナルベシ、ヒキキ ヒキウ  
 ヒキウル ナルベシ

この原本と流布本の記述の相違は、どういう理由によるものだろうか。ちなみに『御国詞活用抄』には本居宣長の門人である田中道麻呂と鈴木朗が関係していたことがわかつてゐる(『本居宣長全集第五卷』「解題」へ大野晋、昭和四十五年 筑摩書房)。

この箇所について、鈴木朗の『活語断続譜』を見ると神宮文庫本・岡田本ともに、「第二十六會」に分類され、次のようになってゐる。<sup>(注6)</sup>

二		
鑄	著	似
イ イル イ	キ キル キ	ニ ニル ニ
イル	キル	ニル
イル	キル	ニル
イル	キル	ニル
イ	キ	ニ
イレ	キレ	ニレ
イ	キ	ニ
イ	キ	ニ

此七行本ハ上ノ六行ト同格  
ニテ第三ノ韻ニテ一モジノ  
詞ナリ  
ケンヲ第二ノ韻ニハ轉シタ  
ルモノナラン歟カクテ又イ  
ルキルミルナドニテスワ  
ルト心得ルハイト後ノ事  
カト云ハレシハ試ム事  
ルト云ニ見ノ本語殘レリト  
ゾイハレシサテ上件ノ三十

六			
干	見	率居	蹴
ヒ ヒル ヒ	ミ ミル ミ	キ キル キ	ケ ケル ケ
ヒル	ミル	キル	ケル
ヒル	ミル	キル	ケル
ヒル	ミル	キル	ケル
ヒ	ミ	キ	ケ
ヒレ	ミレ	キレ	ケレ
ヒ	ミ	キ	ケ
㊦ヒ	ミ	キ	ケ

六行ハ皆作用ノ詞ニシテ第  
三ウノ韻ニテキレスワル也  
此内初ノ六行一類ノハタラ  
キナリ  
コレハ本蹴ニテケハク  
エノツマリタルナルベ  
シ  
(〇〇仲敏云試ム云々  
ハ誤也コ、ロミコ、ロ  
ミルト云、シ)

この分類・整理の方法は『御国詞活用抄』と酷似しており、何らかの形で鈴木朗が『活語断続譜』において展開したと考え

方を『御国詞活用抄』の分類に及ぼしたものと見ることで、きるように思われる。この見方に立てば、本居宣長あるいは

その門人たちも当初の段階では、「蹴 ケエ クウ クウル」という動詞については下二段活用の動詞として捉えていたことが理解される。

古代語の研究が中心であった本居宣長やその門人たちにとって、中世以降にあらわれる下一段活用の「蹴る」を分類する意識は、『活用言の冊子』の段階ではなかったようである。鈴木朗にしても「蹴 ケル」はもともと「クウ」であつて、「ケ」は「クエ」のつまつた形であるとの明確な認識をもっていたことは『活語断統譜』における注の記述で理解されるのである。

いずれにしても『活語断統譜』を検討すると、「蹴る」は鈴木朗によつて初めて「一段動詞」として分類されたと見ることができるのである。ちなみに本稿の筆者は『御国詞活用抄』に鈴木朗が関与したことは間違いないとする立場である。鈴木朗は本来無題であつた『活用言の冊子』を、田中道麻呂が所有していた一本を書写した川村正雄から借用して寛政十二年（一八〇〇）に書写したことが鈴木朗が関与した『言語活用抄』の奥書に記されている。田中道麻呂は本居宣長の信任を得て動詞や形容詞の実例を収集したものと推察されており、田中道麻呂の死去によつてやや複雑な展開になったようである。

鈴木朗が『御国詞活用抄』を書写し、手を加えた時点が寛

政十二年前後であるとする、『活語断統譜』の一応の成立が享和三年（一八〇三）と考えられているので、「蹴る」を「着る」などと同の諸類として分類する方法が導入されたのも『活語断統譜』が成立する時期とあまり隔たつた時期ではないと考えられる。なお、『活語断統譜』の「柳園文庫本」では「神宮文庫本」などにはない「一段活用」の名称が与えられているが、これは時枝誠記が考察しているように、のちに『詞の八衢』の考え方と名称が導入されたものである。

#### 四

国語学史の上で「下一段活用」の名称は、林國雄の『詞の緒環』（天保九年（一八三八））がその嚆矢であると見られている。但し、この『詞の緒環』における分類は「上中下一段の活の図」と名付けて、現在一般に考えられている「下一段活用」とは異なり、雑多な内容を含んでいる。

「上一段の活」としてはだいたい現在の上一段活用の語が考えられている。「中一段の活」としてはカ変・サ変・下二段の語が含まれ、「下一段の活」としては「蹴る」の他に「為せる・宿ね・経へる・得え」を並べる。

『詞の緒環』では次のような活用図が示されている。

上中下一言の活の圖

活の段一上

居射見于似着

㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪

きんいてむ  
たりんて

ゝぬあきつ

㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰

もとづきんめ

ゝをみまゝ

㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶

なふとむ

活の段一中

得経寝為來

㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻

もとへきんめ

㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㋀

ゝをみまゝ

㋁ ㋂ ㋃ ㋄ ㋅

なふとむ

活の段一下

得経宿為麓

㋆ ㋇ ㋈ ㋉ ㋊

きんいてむ  
たりんて

ゝぬあきつ

㋋ ㋌ ㋍ ㋎ ㋏

もとへきんめ

ゝをみまゝ

㋐ ㋑ ㋒ ㋓ ㋔

なふとむ

(天保九年版、架蔵本による)



分類の根拠は、「ル」と「レ」の助けを借りて、五十音図の第二位の音が活用していく語を「上一段」とし、第三位の音で活用する語が「中一段」、第四位の音で活用する語が「下一段」とする。やや雑多な内容を含むが、林國雄が『詞の緒環』の中で自ら指摘するように、『詞の八衢』では一段活用に言及することが少なく、それを補おうとした意欲が溢れているといえよう。「下一段」の名称の出発点であったことは認められる。

ここで視点を變えて、「鈴の屋学派」あるいは「八衢学派」と呼ばれて、江戸時代の後期から幕末・明治の始めにかけて大きな勢力をふるった本居宣長・春庭の二門からやや離れた人々の学説を検討してみよう。

#### 【大國（野々口） 隆正】

大國隆正は天保七年（一八三六）に『言葉の正みち』を刊行しているが、成立がはっきりしないものの、『言葉の正みち』刊行以前にはある程度まとめられていたと推察する「語活法活理抄」があり、「本行」とする動詞は、

①得（う）、経（ふ）、寝（ぬ）

②来（く）

③為（す）

④見る

⑤綜（へる）、蹴（ける）

を挙げている。一音節で活用する動詞を「本行」として考えているようである。<sup>注3</sup>

この分類には活用の基本として一音節語の動詞を重視する富士谷成章の「装の図」にその源流がありそうであり、前述した林國雄の『詞の緒環』と共通した分類意識が感じられる。とくに「下一段」の名称こそないものの、「蹴る」を一つの項に分類していることは注目してよい。

#### 【海野幸典】

海野幸典の文法研究における主著は『天言活用図』（天保四年へ一八三三）および同時期の成立と考えられる『天言活用安良麻之』である。『天言活用安良麻之』は『天言活用図』の解説である。

『天言活用安良麻之』では「蹴る」について、とくに触れられているところはないが、『天言活用図』では「十二天言良行三段活用」として、第二番目の枠に分類され、



などの「一段活用」は分類しているが、「蹴る」については触れていない。

また同じ「鈴の屋学派」である伊庭秀賢（いばひでかた）が天保六年（一八三五）に刊行した『<sup>（注13）</sup>靈語指掌ノ図』でも、「蹴る」についてはまったく触れていない。これについては「蹴る」を取り入れた鈴木朗らと他の門人との、本居宣長や春庭まで遡る門人間の確執を予測させるが、差し当つてのテーマではない。

明治に至つて権田直助の『語学自在』（明治十八年成立）になつて、「上下の一段を区別し、現在と同じとらえ方がされるようになった」（『日本文法大辞典』「一段活用」の項）と考えられているが、

下一段とは、第四位の音「け」「へ」のみにて活くをいふ。（『語学自在』<sup>（注14）</sup>二十八頁）

とあるのみで、具体的な語は示されていない。これだけでは「下一段活用」に関して、権田直助がどの程度の認識を有していたのか、判然としないところがある。

明治七年（一八七四）刊行の田中葵廉『小学日本文典』は、明治初期に西欧文典の影響を受けつつ、日本語文法をまとめた書物として知られるが、「不規則動詞」として、

一段活用

鑄イ 射イ 着キ 似ニ 煮ニ 干ヒ

見ミ 居キ 蹴ケ

三段活用

来コ 為セ

の語が挙げられている。<sup>（注15）</sup>これは鈴木朗らの分類の延長線上にある分類と見ることができるようと思われる。ここではまだ「下一段」の名称は用いられていない。

明治九年の中根淑『日本文典』も『小学日本文典』と並び称せられる文法書で、やはり西欧文典の影響が強いと指摘されているが、「蹴る」についてはまったく触れていない。用言の見方は、全体に『詞の八衢』の影響下にあるように見受けられるので、他の説は参照していかないようである。<sup>（注16）</sup>

明治十二年の佐藤誠実『語学指南』では、動詞を「四段」「上二段」「下一段」「三段」「二段（サ変）」のように分類し、「下一段」の名称が使用されている。

明治二十四年の大槻文彦『語法指南』（『言海』の巻頭の文法論）では、動詞の活用について、

規則動詞

第一類 四段活用

第二類 下二段活用

第三類 上二段活用

第四類 上一段活用

不規則動詞

第一類 カ行変格

第二類 サ行変格

第三類 ナ行変格

第四類 ラ行変格

のように分類する。「下一段活用」については、

変體（下一段活用） 又、規則動詞第二類ノウ（得）、  
うく（受）、まかす（任）、等ヲモ、口語ニテハ、える、  
うける、まかせる、トセリ。此口調ニ從ヒテ、別ニ出来  
レルける（蹴）、いせる（摺縫）、はぜる（裂）、はねる  
（放場）、もめる（所揉）、ナドモアリテ、其語、亦、多  
シ。此類ノ語尾ノ變化ハ「ける・ける・けれ・け・け・  
けよ」「せる・せる・せれ・せ・せ・せよ」「ねる・ね  
る・ねれ・ね・ね・ねよ」ナドトナリテ、其韻ニ、イト  
ネトノ差ハアレド、其變化ノ状ハ、規則動詞ノ第四類ニ  
似タリ。困リテ其類ノ變體トス。

のように解説し、「下一段活用」は「上一段活用」の変體と  
している。<sup>(注1)</sup>

この考え方は、江戸時代の国学者たちの「二段活用」とす  
る分類を継承しつつ、現実の話し言葉を客観的に考察して導  
きだしたものであろう。大槻文彦の文法學説が「和洋折衷文  
法」と称される所以がここでも窺い知ることができる。

## 五

本稿では「下一段活用」の語「蹴る」の存在が、鈴木朗ら  
によって提起されたにもかかわらず、「詞の八衢」を信奉す  
る人々からは無視されていた事実を指摘し、正統の八衢学派  
とは異なる傍系の学統の人々によって取り上げられてきたこ  
とを論証しようとした。「蹴る」が成立した国語史的な時期  
の問題もあり、軽々しく断定することはできないが、大槻文  
彦によって正確に分類・整理されるまで「下一段活用」は、  
無視されるか、「上一段活用」と同列に置かれるという実態  
に合わない分類のまま経過してきたようである。この間の幕  
末から明治にかけての多くの学者の分類については、さらに  
精査する必要があるが、今は私見の及ぶ範囲内で論じたもの  
であり、次の機会に待ちたい。

(注1) 古田東朔・築島裕『国語学史』(昭和四十七年、東京大学出版会) など参照。

(注2) 山田孝雄『国語学史要』(昭和十年岩波書店)

時枝誠記『国語学史』(昭和十五年岩波書店) など。

(注3) 拙稿「近世以前の動詞研究の歴史」(『研究資料日本文法第2巻』「用言編」) 昭和五十九年、明治書院所収

(注4) 松村明編『日本文法大辞典』(昭和四十六年、明治書院刊)

(注5)『括用言の冊子』『御国詞活用抄』ともに筑摩書房刊の『本

居宣長全集』所収による。

(注6)ともに岡田稔・市橋鐸『鈴木朗』(昭和四十二年、鈴木朗

顕彰会)所収による。

(注7)前掲、大野晋『解題』。

(注8)時枝誠記『国語学史』(二二七頁うゝ二三八頁)

(注9)無窮会・神習文庫蔵『活語活法活理抄』(自筆本、無窮会  
のご厚意によって撮影したマイクロフィルム版による)。

拙稿『幕末における日本語文法研究の一潮流——大國隆  
正・海野幸典の用言研究並びに資料——』(『作新学院大学紀要』  
第8号 平成十年三月)に一部を翻刻し、解説・紹介した。

(注10)京都大学文学部蔵『天言活用安良麻之』(同大学のご厚意  
によって撮影したマイクロフィルム版による)

(注11)無窮会・神習文庫蔵『語格指掌図』(無窮会のご厚意によ  
って撮影したマイクロフィルム版による)

(注12)雄松堂マイクロフィルム版『国語学資料集成』所収によ  
る。

(注13)無窮会・神習文庫蔵『靈語指掌ノ図』(無窮会のご厚意に  
よって撮影したマイクロフィルム版による)

(注14)明治二十七年、近藤活版所刊(昭和女子大学蔵本)によ  
る。

(注15)明治七年刊本、架蔵本による。

(注16)明治九年刊本、架蔵本による。

(注17)『新訂大言海』(昭和三十一年、富山房)による。

(作新学院大学教授・本学国文学科非常勤講師)